

POA 5

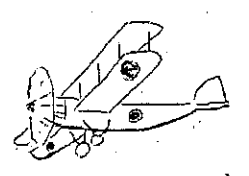
GHO-HYON

7

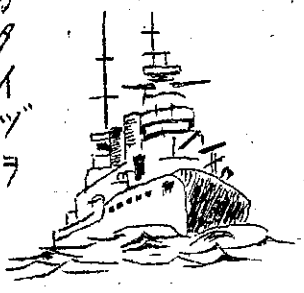
18  
P

いよ／＼勉強にも運動にも良い氣候と  
 なります。何事にも一生懸命に本氣  
 になります。

成せば成る成さねば成らぬ何事も  
 成らぬは人の成さぬなりけり。



ジンナー  
 ツツリカタ



ダイエンジン ナガタイツラ  
 ギヨネンボクガマダガツカウニア  
 ガラナイトキカイグンダイエンシ  
 フラミマシタ。スサキニタクサン  
 ヒカウキガヤマシタ。カスガカン  
 毛ミナトニトマリマシタ。  
 サウシテキルトチキノジウバクゲ  
 キキガトンデキテカスガカンメガ  
 ケテバクダンヲオトシマシタ。

カスガカンモカウシヤハウヲウ  
 チダシマシタガバクダンガアタ  
 ツテカウシヤハウガウテナクナ  
 ッタトキスサキカラセントウキ  
 ガトビダシテジウバクゲキキラ  
 オヒカケマシタ。  
 ジウバクゲキキハドンドンニゲ  
 テイキマシタ。セントウキモド  
 ンドンオヒカケテイキマシタ。  
 セントウキノハウガジウバクゲ  
 キキヨリハヤイデス。ダカラソ  
 バマデイツテキカンジウヲウチ

マシタ。ソレハ、エンシフデスカラ、  
アタツテモオチナイデ、ジブノハ  
ウヘトンデイキマシタ。

回ミヤノルマ、インヅトクコ

ワタクシハ、ニチエウニ、カアチヤン  
トホエチヤントミンナデ、ミヤノハ  
マヘアソビニイキマシタ。

カアチヤンガ「オヨイデイ、イト  
イッタカラオヨギマシタ。ママゴ  
トモシマシタ。ワタクシハ、オキヤ

一ナリマシタ。カアチヤンガ、  
ハンゾカラ、ミンナオイデ、

トイヒマシタ。ワタクシハ、ウレ  
シクテ、トンデイキマシタ。ワタ  
クシハ、オイシサウニタバマシタ。

サウシテ、ウタラウタツタリハ、ネ  
タリシテ、カヘツチキマシタ。

回サル、オクヤマヨシコ

ワタクシハ、オトウサントシキヤント  
サルニ、ニイキマシタ。  
サルガ、ハコノ中ニ、ハイチキマシタ。

「サル、サル」  
トヨビマシタ。

「キヤン、キヤン」  
トナイタカラ、ワタクシトシキヤンハ、ニ  
ゲマシタ。オヒル、ナツタカラ、オヒル、  
ヲオイシク、オカズデ、タバマシタ。

# 岩子ちゃん

二年生

雨宮ミエ

かはいさうに、岩子ちゃんは、べんき  
あも出来たし、からだも大きかた  
のに死んでしまて、おしいことを  
しました。おかあさまが東京で  
したとき、いたとき、まあ、おかは  
いそうに、どんなにか、おかあさま  
のおかへりを待て、ぬたでせうと  
おもひました。



岩子ちゃんは、私と一しよに、べんき  
うもして、ぬたのに。朝きて、岩子  
ちゃんのおぢを、ながめながら、ほん  
たうに、岩子ちゃんは、死んだ。と聞  
いても、へんじもしない。岩子ち  
んの、おぢも、かたちも、ありません。

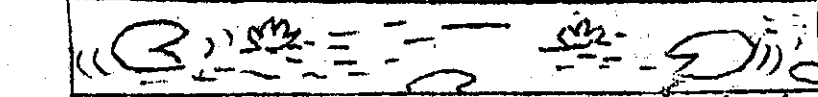
浅沼清子

岩子ちゃんは、三日やすんだだけで、  
朝の三時ごろ死んでしまひまし  
た。私は、それも知らないで、ねて  
ぬました。さうすると、おかあさん  
が、およ子、岩子ちゃんが、死んだよと

いひましたから、びくりにしてとひ  
おきました。そうして岩子ちゃんの家  
の前まで行きました。たら、家の中  
はまぐらでした。岩子ちゃんのこと  
をかかんがへると、なみだが出ま  
す。

岩子ちゃんのさいごのつづりか  
しゃうか。

私はしゃうかが大好きです。そ  
れで、しゃうかの時よこやませんせ  
いかよしえせんせいがいらしめる  
と、私はうれしくでたまりません。



そして、せんせいがふ士の山をう  
たはせると、私はとてもうれしく  
うたまりません。だうしてとい  
ふと、そのふ士の山のうたが、すき  
なのです。 さほり。

また、しゃうかの時間は来るけれど、  
せめて大好きな富士の山を、  
うたで上げませう。

岩子ちゃんのおごは、あいておるけれど、  
みんなは、あなたもなるやうに、  
いつまでも、思ひでゐます。



初秋や  
よふりからまた  
風のおひ

くものす 淺沼庫雄

まのふくもがオをはつてゐるのを見  
た。そこへ風がふいてきて、そのすの  
糸を切てしまつた。くもはまた糸を  
はつた。ところが又風に切られた。そ  
れでもくもはまた糸をはつた。僕は  
之をみてか人がへた。僕は書方がへ  
ただ、けれど一生けんぬいなりつた  
ので少しはかけるやうになつたが、  
まだ、だめだ。このくものよふた  
なんども々々もまけず、にべんまふう  
して、もつてく。じゆうずにならなけ  
ればなりません。また書方ばかりで

なく、ほかのことともこのくものふうに  
まけず、にべんまふうと、じゆうずにな  
るとおもふ。

評 とうです、しつかりやうをい

どん吉のうた 池山桂造

と人吉がこんなうたをうたつた  
つと、ここからきたか、と人吉できた木のは  
くるく、まはつてくものすにかゝる  
風にふかれてゆら／＼すれば  
くもは虫だととんでくる  
どこがらきたか、と人できた木のは  
くるく、まはつて池の上におちる  
なみにゆられてゆら／＼すれば  
鯉はえさかとまうてくる。

◎教育新語御下賜の日

明治三十三年十月三十日

おまつり 兒玉孝三

十一月一日はおまつりです。僕はおまつりにはうまいです。おししが家の中に入つてばくくしたり。おみこしか所どうをまはりまします。おみこ二年以上の人がかつぎます。そしてはまがつて道はおみこしてけんぶつの人でいっばい。どこの家でもおみこ人をまつけてきれいです。こうしておまつりするおみこさんじゆうまへのおれい。です。僕らはよくおまつりしなげればなりませぬ。

海をこえて山をこえていつもから

大神宮のある山の麓らの所に  
はやくこいこいおまつりよ。

ゲンカンエウギ 浅沼榮一

私ハとしボウト、ゲンカンエウギヨツクリマシタ。一番ハジメニ兄サンノエノガヨカリテ赤ト黒ノカン長ヨツクリマシタ。ケレ共ヘタニデキタ。トツクリナホシマシタ。ソレカラ赤ト水ライガ五枚黒ノ水ライガ四枚デキマシタ。ソレデドウヤラソツタノデ。今日學校ヘモツテキヨウト思ツタラとしボウガモツトウマクツクツテカラモツテユカウト言ツタカラ。エノドハウントヨクツクツテ。ミンナヨオドロカシテヤロウトオモフ。

評 ナンデモコルモチデヤリナサイ  
ヲハリ

けんやくト  
べんきやう

### 尋四の綴方

秋

秋が来た。秋が来た。勉強に一番よい時の秋が来た。僕は一生懸命勉強しようと思ふ。そして一学期にへんな点であつた所を一番勉強によい。二学期によりかへさうと思ふ。秋には何をやるのも、氣持がよい。書方をするのも、遊ぶのも。又秋になると、野山や草本が青々として来て、氣持がよくなつた。ひかうきのやうなとんぼもたくさん出て来た。それにはひきかへて、氷屋はだんくへつて来た。

鶴澤寛

秋

吉田亮二

暑いくといつてゐたまた。夏も過ぎて秋のなかばになつた。上をみるとひかうきのやうなとんぼがひゆうく。ととんでゐる。山をみれば木やくさがあをくしてきもちがよい。又夏中あんなにおよぎで海にはぎやかだつたが、今海へいってみると、だれもおよぐ人がなくてさびしいぐらゐだ。べんきやうするにも遊ぶにも秋は一番よい。

ひさちやんの死

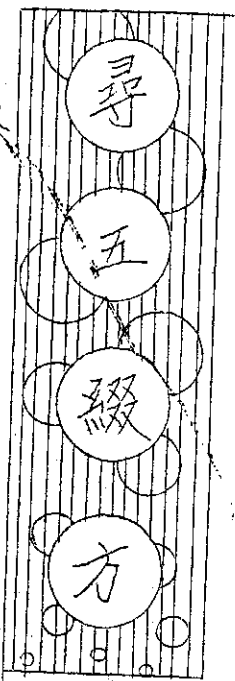
高橋 静子

ひさちやんは九月三十日の午前二時はんにこのよきたちました。私はひさちやんの死んだのをゆめにもしらなかつた。私が朝起きるとなんたかなんようくわんかさはがしかつたから。お母様たきいたり。ひさちやんが死んだ。といつたので。私はおもはず。ひさちやんが。ととおどろきました。二十四日の日は私と。しいねえちやん。しいねえちやん。といつて。きりぬき。をしてあそびました。あんなげんたつたひさちやんがもう今朝はこのよをたつちやつた。私は二十四日の日のことをおもふと。かはいさうで。かはいさうで。たまりません。

博之のおもひで

菊池 久香

私のうちの四つの博之が九月一日にしました。びやうおんに四日までおました。しんだのはゆうがたのちやうど四時でした。まいにちく。夕方はおかあさんとおはかたいきます。いまごろはごくらくですなあそびましてもます。やまこえてきれいなのはらさとほつていつたでせう。私はうちでいちばんすきたつた子は博之です。私は博之はしんだとはおもいません。そこらですなあそびましてもますかへつてくるやうなまがしてたまりません。どうしてあんなじようぶな子がしんだのでせう。



児童劇

藤籠 渡子 創作

朝々冷んだんと涼しくなる秋となつた。空はきれいに深くすみ。東京でもさきなられたせみの音もやも頃でありう。今日も青空に白いちがれ雲がとび。秋の光線がなごやかにながれてゐる。防風林がみんく。せみがやかましく泣きだしてゐる。もうすぐまちにまつ運動會もせまり胸はうれしさにわくわくおどつてゐる。運動會の練習でいそがしい。バナナの葉は秋風に吹かれてざらざらとなり。大きな葉をゆらゆらと動かしてゐる。志ちやんもどんぐ。大きくなつて秋ま云る頃にはもう片葉も言へるであらう。涼しい夜をよりこび二時ろが草つゆを吸ひながらより聲でないてゐる。

ままことおもひ  
五人 五人  
幕がふくと林のすゝしい所で志ちやん、月ちやん、かつちやん、静江さん、千代ちやんがままこをしておる。  
志子「静江さん、畠からナツパをとつておいでなさい。」  
静江「はい。」  
静江さんは幕の中へ入る。

◇——一幕——◇

まんがあくと  
かつ「おつかれた今日はもう用がすんだから一休みしよう。」  
といつてかつちやんは大きくあぐびをしてゴザのはじへねころがる。  
静江「たがいま。」  
志子「まあ、たくさんあつたわねえ。」  
志子は静江さんからナツパを奪取る。

千代ちゃん月ちゃんどぞの向ふで何か本  
を一生けんめいによんでゐる。  
千代「かつちゃんさんなどここにねるといま  
れるよ。」

かつ「おねねむかつた。  
といて起きてきてまた用をはじめる。

まぐがあとと。

静江さんと千代ちゃんをけむ人形をたいて何か  
話をしている。

日「静江さん千代ちゃん公園に遊びに行か  
なう。」

静江「まあ、うれしい。」

千代「といてすぐ行くよ度をする。」

かつ「まあ、あんたたちどこへ行くの。」

千代「あ、ね公園へ遊びに行くよ。」

といて月ちゃん静江さん三人幕の中へ入る  
岩子かつちゃんからつづいて幕の中へ入る。

◇——幕——◇

なまげん 無澤あさひ。

誰も居ないえんがはで

一人ぼっちで遊んでた  
るまげん一人でさびしいな

いつしかぐうぐうおてしまふ

ゆめを見ながらおてゐたが

何か思つてふと目がさめた。

足の下にはホズミ草

私のゆめをかちつた

くすくすたいうむはなしたら

びつくりぎょうてんにげつた。

◎  
よく見たりよくきいたりよく感じたりして

深みのある文が望ましいのです。

男生の文にはいつもよい文がありません。

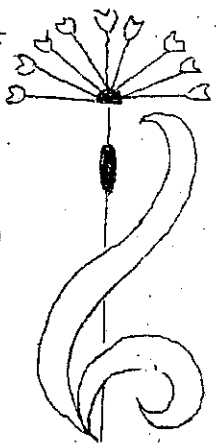
ふだんの事をしつかり書けばよいのです。

女生にはわりあひによいのがあります。

しつかりやりなさい。

### 三尋

#### 六



#### 秋の海 菊池英行

雲一つない空、にじり一つない海、いよ  
秋らしくなつた。秋の海は青々としてきれ  
いだ。よつばりを釣つておると折から

「ピー」一羽の海つばめが海の中へ

くちばしをつつこんだと思ふと、一匹の魚を

くはいた。うれしさのあまり一撃「ピー」

とやったがせつかくの魚をおとしてしまつた。

海つばめは悲しさのあまり元氣のない聲で、

「ピーピー」ないて飛去つた。

港のほとりつにまた来たのか一つの白帆が風を

うけて勇しくはしつて来る。よつばりは一

匹二匹つられて少しになつたが、空には一ち

がり二ちがりと雲がめらはれた。すうーと

海風の香のある風が吹いて来た。今まで赤

赤とした太陽に照らされておたが此の風は秋ら  
しくなつた。さつきの白帆は黒岩のところに  
来いおる。海つばめはなほ根氣よく魚をつ  
ておた。扇浦の山には青々とほつきりと葉が  
しげつておる。ほんとは秋らしくなつた。

#### 秋の野山 横尾ニブエ

いこを見ても黄色の葉がキラキラとてかの様  
舞ひながら落ちて来る。野を見るときれいな

草が青々と生え茂つておる。木の葉が落ちた

おとはまるで敷物をしいた様に一面赤茶色にな

つておる。又木の葉をむきを見つめておると冬

の事が想像される。

又東京の秋を思ひ出し見るともみぢの葉がさ

れいに赤く色をかへるのほちやうどおの木の

葉が赤く丸まる様です。ちやうど今頃もみぢ

の木の下をくづつて行くやうな山の木の生え茂

つておる所を通ると我にかへつたやうな氣にな

つて心がとびたちます。小鳥もうれしさうに

高い空を鳴きながらとんでおる様はほんとと

ゆわいでも。だんく夏の気分がさつて  
いきます。

■十五夜 森下ヤス子

「よつこちやん、来てごらん。」  
と言ふお隣の和子さんの聲がした。よつこ  
ちやんが行った。誰かが「お月様か」と  
言った。春吉さんが行きたかつたのにつれ  
て外へ出た。ちやうどお月様はたまなとま  
なの間から見えおた。  
そこでしばらく見てからをばさんの家へ行  
て見ると家の中にお月様の光がさしこんどお  
た。家に歸つて勉強しておるとまどから月  
の光がさし、大へんおもしろかつた。

■でんぐ熱 毎田美津

「でんぐ熱、でんぐ熱、大へん熱が高いさ  
です。四十度から多て聞いてもわつと  
す。程ですから私は大いいの病氣にはかゝる  
とお母さんが言つたので今度のでんぐ熱には

かからないつもりで學校から歸ると口をすい  
だらうがいをしてたりしてゐるので今はまだか  
りません。あれでも何時なんとき病氣になる  
かわりません。私に私は用心に用心をかかぬて  
氣をつけるつもりです。家では今私の妹がと  
うくかゝつてしまひました。

■でんぐ熱 藤井不二雄

水曜日學校で体操をして家に歸つて本を下すと  
何だか頭が痛いので体温計を計つて見ると三十  
八度なりで驚いて水でひやしたかだんく体が  
だるくなつたので布団に入った。其時はもう  
起る元氣もなくあつくるしくしてゐるしく泣  
きたい位になつた。家の人かすぐ氷でひやし  
てくれた。夕方又計つて見たら三十九度もも  
うこんなつらい目にあふなら死んだ方がよつほ  
どましの様だ思つた。  
此の熱病に島の人かすぐおふんがなつた。もう大  
体なほつて来たようだが今度からかゝらないや  
うに氣をつけよう。  
(をほり)

高等科第一学年

笹本文

この犬村にとつて一番面白いお祭は一年に一回である。其の面白いお祭  
は来る十一月一日である。其のお祭には授業は休みで、そのかはり大神  
宮山に参拜に行く。歸りに高等科の生徒、青年團、在郷軍人などか小  
さい生徒が歸つてから各々、みこしをふるすのである。そのみこし  
がおりて来るまでの下のさわぎといつたら口では云へない程やかま  
しい。みこしがありると、先づ犬村一週、そして波止場の所につくつ  
てあるみこしのおまきはよくのである。其の夜はみこしかつぎで、か  
やかである。九神宮山の道にはいろいろ、こつけないな、とうろうがあ  
る。村から見ると、何かの行列のやうに見える。僕等にとつて、その樂  
しいお祭も雨がふらねばよいがと心配してゐる。

菊池愛子

暑い、夏も過ぎて何時しか涼しい秋がおとつれて来た。今まではあ  
暑い、と言つて海へ泳ぎに行つて大ぜいの子供が泳いでおたが今は  
海岸へ行つても誰のすがた一つ見えない。それ程秋は涼しいのだ。夕  
方になると、せみはミンミンと鳴き、とんぼは樂しげに大空を飛びまわつ  
てゐる。その水を見て聞いても秋は何となく氣持がよい。今は勉強し  
ても、運動にもよい時季だから一生懸命勉強し運動しよう。



江平佐太

一頃モモにミバイがふえると大変だと思つてモモの木をきつたりモモ  
こおしたりしてなくさうして村の人達や生徒は一生懸命になつて  
いぢしてゐるのです。此がなくなつたら役場の人達や農家の人達  
んたにうれしがることとせう。そなたら農家の蔬菜がどんな  
よく出来るでせう。もうなつたら村もよくなることと思ひます。

菊池芳香

あゝ、なんといふ可愛さうなことでせう。私の弟、博之は、今年四ツになつ  
てついに歸らぬ人となりました。家の人は皆悲しい。白ばかりを送つて  
あまや私もいつも學校から歸るとすぐあしりをするのがたのしみだ  
歸りました。もうそんなたのしみはなくなりました。可愛さうな弟よ、あ  
世で幸福にすまさい。

石津俊彦

僕達高一年にとつて恐ろしいものは白紙である。先生が白紙を手にとつ  
て言はれる「皆これだけ勉強したかしら」で見る。其の時皆の口から  
もれる聲「ああ」だ。其の白紙の上には書かれる点数や如何。

### 高二作文

病氣

高木代子

お母さんが今流行の風邪にとうとうかゝつてしまつた。昨夜お風呂に入つたのがいけな  
つたんだね。と急に年寄つたようにおつしやつた。私はおつくりして、又お母さん風邪  
と云つたら、おの御飯をかけたね。  
いつか本で見た。おの御飯をたぐ様を、母さん心配さうに見てゐます。ふとそれと思ひ  
出した。でもそれは五日前。今では時々起きて居ます。あの恐しかった暴風の夜も  
もう昔、お母さんの病氣があの風と共にどつかに行ってしまつたのか。

人生

上部國男

おとしたは、お母さんに安らかなる夢路は閉ざされた。傍に寝てゐた母はすやくと眠つてゐる。  
あたりはしんじりして淋しさのしんと胸に迫つて来る。お入らうとあせればあせる程いよ  
／＼眼はさめて来る。時計の刻みはコチ／＼と平気で續けてゐるか。おれさえも腹立たしい。  
おと人間の一生といふ様な事に考かほつて行つた。人生といふものは、おれさえも、  
一刻／＼おれに迫つて来るのだ。恰も長い夢と思へば、何の為に此の世に生れて来たか。おれさ  
い時、一時の夢だ。生れ、ば誰しも必ず死ぬ。一体何の為に此の世に生れて来たか。おれさ  
後してゐるのだ。斯く思へば、學問も知識も財産も何ものもいぬ。おれさ、おれさ、おれさ、  
けてゐる時、又別にかたがた来て、今の心を教へるかのやうに。人は死んで、おれさ、おれさ、  
ものである。その霊が後の世の人にまでも色々と見られるのである。後世の人に、おれさ、おれさ、

にしなればならぬ、何も取かしの事ゆなつ様にした、其の為にはやはり學問も必要だ、知識をひろめ徳を積むことも必要だ、かう感づいた時、僕は何か安心した様な気がして何時の間にか安らかな眼に入つてしまった。

或る一夜

中 沢 セツ子

夕飯をすまして窓を明けて見ると雨がしよほしよほ降つてゐた、又雨が、とひとり言を云ひながら窓をしめた、間もなくお風呂に入つてゐると今までのしほしよ降りの雨はよく本降りになつて、お風呂を立って、降つて来た、おつと寒さを感じた、お風呂から出て冷たい風にあたりながら着物を着かへ時計を見ると七時だった、三十人位縁側で唱歌を歌つてから枕に向つた、勉強が終つてすぐ床に入つた、いつの間にか雨はやんで星が出てゐた、突如しに空をなめめなからいつのまにかねむつてしまった。

立てよ國民

奥山 貞美

我が大日本帝國はアジアの東部にあり、万世一系の天皇を戴き臣民は克く忠に克く孝である、然るに現今我が大日本帝國は世界の國々を相手に立つて行かねばならぬ、それには國民が一致して海には強大なる海軍、陸には勢銳なる陸軍、空には勇敢なる空軍を有たねばならぬ、しかし此の人々ばかりでは國防は果し得ない、軍人でない人も皆國防に務めなければならぬ、それには身体が第一大切である、大いに健康に務めなければならぬ。

終り

### 専女綴方

鯨

一年 菊池ヒサ子

此の間のことだった。學校から帰つて、丁度夕方の掃除の終つたところへ、その小母が来て「鯨が潮を吹いて大さわがしよ」と教へて下さつたので、急いで海岸へ行つて見た。海岸ではななほど大勢の人々が何かいひながら海の方を見てゐる、一寸たうかい鯨がゐるつて、とそこをたしかにきいたり、本當だよ、とどいつて海の方を見えおゐる、私も一往懸命海の方を見たと誰かが、ほら吹いた吹いたといつて指す、私も急いでそつちの方を見たり成程潮を吹くのが見える、そして時々鯨を出す、どうして鯨がこんな處に入つたんだらうと私は始めて右の友達と話すが

暗くぢぢりのも志村の夢中で見ておた。おんでもイロシ鯨で二頭あつたと人はいつておた。浅い西町の海岸近くへはとりに来たおつた。

お祭

一年 稲田けつ子

樂みにまうてゐたお祭にもう目の前には迫つた。月日の三つのは早いもの、遂この間お正月だと思つておたらもう十一月はぢぢりですもの、早く十一月一日のお祭が来たよ、あゝ何日と指折り教へてゐる中にもう三日の後に来る、お祭のことを寺へりも胸がどきどきして来るもうあと四五日と思ふ、とうかしくてなまらぬ。

或夜 一年 菊池つねみ

或夜 二年 山田春子

あまより暑いのでそのと庭へ出た。 あゝ暑い何と遊べ暑い苦しい夜だ。 家は海に床をけられて庭に出た。もう 赤いことであらう。すっかり氣持も 夜更けた誰一人ゐるものもない。 淋しくなつて来た。空を仰げばよく暗水 小町、空には宝石を散りばめたやうに 二星が宝石をちりばめたやうにまじり、 星がきらきらとしてゐる。 あゝあの月 らと光つてゐる。月がさうりと吹い 月も高くかかやいてゐる。 清く氣高い 月静かに何事かを物語つてゐるやう だ。たまにそよ風はバサバサの葉がゆ らゆらとゆれてゐる。こんな涼しい夜 景だ。この清い月、どんな人間でも て思ふ存分眠つたりどんなによい氣持 景だ。この清い月、どんな人間でも だらうと思つた。あまよりいゝ氣持ぢな 正しい心になつて呉れる月。 のでしばらくぼくゆり木に寄りかかつ ぼくだが淋しい氣持ぢになつて来た。 てゐた。何時の間に出て来たのか空が ども尚しばらく考へながら月に對つて 浮いてゐる。近づくに雨でも降りはし 立つてゐた。 ないかと思はれぬやうな標氣だ。

御寄贈

- 一 金拾円也、 淺沼文之助代より令嬢香葉返礼に代へ保護者金基金へ
  - 一 金壹円五拾錢也、 武田織江代より尋一文庫書籍代として
  - 一 漆川神社御改修記念寫眞帖一冊、 今神社より
- 右御寄贈に對し誌上を以て厚く御礼申上げます。

學校日誌より

九月廿四日は秋季皇靈祭にて休業致しました。  
 十月十七日は神嘗祭にて休業致しました。  
 十月二十二日から一週間、流行病猖獗の爲短縮授業と成りました。  
 又同日から一週間、健康週間の催がありました。

昭和九年拾月第百五拾号

大村高等小學校ナデシコ編輯部

